

# 工業高校における生徒の自己概念とキャリア意識の関連性

鳥取大学工学部 ○島田和典

## 1. はじめに

本研究の目的は、工業高校生の自己概念とキャリア意識との関連性を、工業高校出身の短期大学生の意識を視野に入れ、検討することである。

自己概念とは、「現象的自己についての組織化された概念」を意味し、個人のあらゆる経験の場を源泉として形成される「自分自身に対する捉え」と言い換えることができる。筆者らはこれまで、工業高校生の自己概念を構造的に分析し、「自律志向性」、「キャリア志向性」、「専門的能力志向性」、「社会的価値志向性」、「自己モニタ志向性」の 5 因子(以下、これらを自己概念構成因子群、下位項目を「工業高校における自己概念尺度」とする)を抽出した<sup>1)</sup>。

本来、自己概念の形成は個々の生徒の自己実現に向けてなされるものである。工業高校の場合、専門的な授業や実践的な実習等の学習経験が、自己実現への道しるべとなり、工業高校生としての自己概念形成に影響を及ぼす。筆者らはこれまで、工業高校に特徴ある要因として、実習や課題研究などの実践的な科目が自己概念形成に重要な役割を果たしていることを指摘してきた。しかし、これまでの研究では自己概念の形成過程に言及するものであり、この自己概念が生徒の将来にどのように有用な働きをするかについては十分な検討がなされていない。とりわけ、将来を見据えた個々のキャリア意識の形成は、極めて重要な要因であると考えられる。

ここでのキャリアとは、「個々人が将来にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と捉えられる。このようなキャリア意識について河崎(2005)は、大学生を対象としたキャリアに関する意識調査を実施し、81%の者が将来への不安を持っている現状を挙げ、自己のキャリア能力の育成が課題であると指摘している。また同研究では、キャリアに関する能力の質問項目に対し因子分析を実施し、「将来展望・設計」、「意思決定への自信」、「情報収集・経験への積極性」、「肯

定的な自己理解」、「他者との関係重視」の 5 因子(以下、これらをキャリア意識構成因子群、下位項目を「キャリア意識尺度」とする)を見出している<sup>2)</sup>。本尺度は大学生を対象としたものであるが、その作成過程や構成因子、下位項目等の内容から、基本的に工業高校生及び短期大学生にも利用可能であると考えた。

そこで本研究では、工業高校での専門教育を中心とする教育課程や部活動等の課外活動で形成された自己概念が、将来を見据えたキャリア意識にどのような影響を与えるかについて、線形回帰モデルを想定し、上記 2 つの尺度を利用して明らかにすることを試みた。その際、工業高校を卒業して間もない自動車工学系短期大学で学ぶ学生の意識の形成状況を視野に入れることとした。

## 2. 方法

**調査対象:** 調査の対象は、大阪府内の工科高校生 3 年生 251 名、岐阜県内の自動車工学系短期大学生 1 年生 71 名(工業高校出身者に限定)、計 322 名とした。

**測定尺度:** 自己概念の形成度を把握するための調査票に、筆者らが作成した「工業高校における自己概念尺度」19 項目を設定した。また、キャリア意識を把握するための調査票に河崎の作成した「キャリア意識尺度」20 項目を設定した。

**手続き:** 調査は、平成 21 年 4 月に実施した。調査後、工業高校生と短期大学生別に、自己概念及びキャリア意識の形成状況を確認した。次に工業高校生のキャリア意識構成因子群を基準変数、自己概念構成因子群を説明変数とする重回帰分析を実施し、影響力の検討を行った。

## 3. 結果と考察

調査の結果、有効回答は、工業高校生 217 名、短期大学生 67 名、計 284 名となった(有効回答率 88.2%)。また、分析にあたり、自己概念構成因子群、キャリア意識群ともに既報の調査と同様の傾向であることを確認した。

### 3.1 自己概念の形成状況

調査対象者の自己概念の形成状況を工業高校生、短期大学生別に集計し、2元配置分散分析を実施した。その結果、交互作用が有意だったため ( $F_{(1,4)} = 8.03, p < 0.01$ )、各水準別に単純主効果検定を行った。LSD法による多重比較の結果、自己モニタ志向性因子を除く4因子すべてにおいて短期大学生が工業高校生より有意に高い自己概念を形成している傾向が確認された(図1,  $F_{(1,282)} = 7.35 \sim 42.26, p < 0.01$ )。本調査の短期大学生は工業高校出身者であり、高校3年生の1年後を想定すると、1年間で意識の向上が図られる可能性が指摘できる。しかし、短期大学生は就職や資格取得について高い目的意識を持っている他、就職した生徒についてのデータは反映されていないため、今後、就職者を加味した検討、及び同一生徒群による時系列的な変容を検討する必要がある。

### 3.2 キャリア意識の形成状況

キャリア意識の形成状況においても同様の分析を行った結果 ( $F_{(1,4)} = 4.99, p < 0.01$ )、「意思決定への自信」、「肯定的な自己理解」以外の3因子において短期大学生が工業高校生より有意に高い自己概念を形成している傾向が確認された(図2,  $F_{(1,282)} = 12.85 \sim 39.57, p < 0.01$ )。本結果に対しても、自己概念と同様の指摘ができる。一方、2因子においては有意な差異は認められなかった。

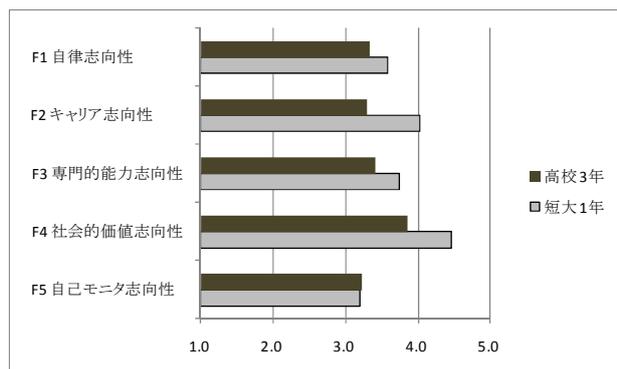


図1 自己概念の形成状況

### 3.3 自己概念がキャリア意識に及ぼす影響

次に、キャリア意識構成因子群を基準変数、自己概念構成因子群を説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、キャリア意識構成因子群すべての因子において有意な重相関係数 ( $R=0.44 \sim 0.74$ ) が得られ、有意な影響力が認められた(表1)。特に、自己概念の「自律志向性」や「社会的価値志向性」の影響力が強く、これらの因子の重要性が指摘できる。また、自己概念の「キャリア志向性」が必ずしもキャリア意識全般に影響を及ぼすことはなく、「未来展望・設計」、「意思決定への自信」、「肯定的な自己理解」への影響に留まった。

### 4. まとめと今後の課題

以上の結果から、本研究では工業高校で形成された自己概念が、将来に向けたキャリア意識の形成に寄与することを明らかにした。今後は、就職者のデータを加味した検討の他、さらに多様な観点から、工業高校生の自己概念と進路発達課題との関連性について検討する必要がある。

#### 【文献】

- 1) 森山潤・島田和典・松浦正史：工業高校における生徒の自己概念の構造 日本産業技術教育学会誌 Vol. 46-4, pp.19-28 (2004)
- 2) 河崎智恵：キャリア教育実践に貢献できる教師教育の課題 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 Vol. 14, pp.75-81 (2005)

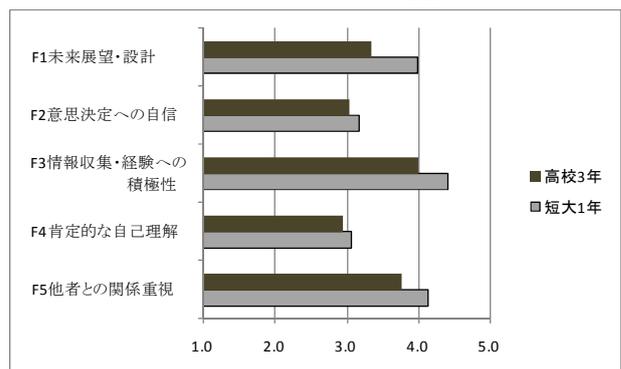


図2 キャリア意識の形成状況

表1 キャリア意識が自己概念に及ぼす影響

基準変数	標準偏回帰係数					重相関係数	F値 df(2,549)
	F1自律志向性	F2キャリア志向性	F3専門的能力志向性	F4社会的価値志向性	F5自己モニタ志向性		
F1 未来展望設計	0.20 **	0.51 **	-0.1	0.18 **	0.02	0.74 **	49.99
F2 意思決定への自信	0.23 **	0.15 *	0.2 **	0.02 **	0.30	0.65 **	30.19
F3 情報収集・経験への積極性	0.15	-0.02	0.1	0.41 **	0.04	0.57 **	20.05
F4 肯定的な自己理解	0.26 **	0.23 **	0.0	-0.07	0.27 **	0.55 **	17.96
F5 他者との関係重視	0.22 **	0.04	0.0	0.15	0.12	0.44 **	10.14

N=217 \*\*p<.01 \*p<.05